

子どもの発達と学びの連続性を共通理解するために

— 保幼小合同研修プログラムについての一考察 —

小松和佳

(2020年10月5日受理)

Understanding the Continuity of Children's Development and Learning

— A consideration of the joint training program for early childhood and elementary educators —

Waka Komatsu

Abstract: The purpose of this study was to examine the joint training program for early childhood and elementary educators in order to understand the continuity of children's development and learning. The principal content of the training program was to provide experience to early childhood educators and conduct conferences on the same. Participants included six early childhood, five kindergarten, and sixteen elementary school teachers serving in the A elementary school area. Nine categories were created from participants' impressions received after the completion of the joint training program. Examination of the nine categories suggested that the joint training program could help in understanding the continuity of children's development and learning.

Key words: connection with early childhood and elementary education,
joint training for educators at early childhood and elementary education,
the continuity of children's development and learning

キーワード：保幼小接続，保幼小合同研修，子どもの発達と学びの連続性

問題と目的

子どもの発達と学びは、幼児期から児童期へと連続している。幼児期から児童期へ子どもの発達と学びを円滑につなぐ課題としては、保幼小接続が挙げられる(酒井, 2011)。横井(2011)は、保幼小接続が課題として挙げられる理由の1つとして、環境を通じた自発的な遊びを中心とする幼児期の教育と、系統的な教科学習を中心とし、時間により生活が区切られる児童期の教育の相違にあることを示している。幼児期と児童期の教育の相違については、子どものそれぞれの発達段階にふさわしい教育を行う必要があることから、教育のねらい、目標、カリキュラム及び教育の方法等異なっている(佐々木, 2016)。そのため、保育者と

小学校教員には、それぞれが担う教育の違いを踏まえた上で、幼児期から児童期へ子どもの発達と学びを円滑につなぐ必要性が求められている。

2005年に出された答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」(文部科学省, 2005)を受け、2008年に改訂(定)された幼稚園教育要領(文部科学省, 2008a)及び保育所保育指針(厚生労働省, 2008)には、児童期の教育とのつながりを踏まえた保育の充実及び小学校との積極的な連携の必要性が示された。一方、2008年に改訂された小学校学習指導要領(文部科学省, 2008b)においても、幼稚園等との連携や交流の機会、また、入学当初における生活科を中心とする合科的な指導の工夫等、幼児教育とのつながりを意識した指導の必要性が

示された。

幼児期から児童期へ子どもの発達と学びを円滑に接続させる具体的な取組み例としては、子ども同士の交流活動、教職員の交流、保育及び教育課程の編成、指導方法の工夫等があり（文部科学省・厚生労働省，2009）、教職員の交流等の人的な連携から始まり、子ども同士の交流活動、そして、幼児期から児童期への教育の連続性を確保する保育及び教育課程の編成及び実施へと発展させていくことが重要である（文部科学省，2010）。具体的な取組み例の1つである保育及び教育課程の編成及び実施については、保育者と小学校教員が、保育及び教育課程を同時に作成し、保育及び教育のねらいや指導内容を共有することが必要である（一前・秋田，2012）ことも指摘されている。また、横井（2007）によれば、保育者と小学校教員は、既存の保育及び教育課程を共通の視点から捉え直すことが重要であるとされている。このように、保育者と小学校教員には、幼児期から児童期への子どもの発達と学びの連続性を支えるためにも、共通の視点を持った上でそれぞれが担う教育のねらいや指導内容を理解し、保育及び教育課程を編成、実施する必要性が明確にされたのである。

その後、2017年に同時改訂（定）された3つの法令である保育所保育指針（厚生労働省，2018）、幼稚園教育要領（文部科学省，2018a）及び幼保連携型認定こども園教育・保育要領（内閣府・文部科学省・厚生労働省，2018）には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以下10の姿と記す）が明記された。10の姿とは、幼児期の教育において育みたい3つの資質・能力である「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」や、保育内容の5領域によって示された子どもの姿を具体的に示したものであり（無藤，2018a）、保育者が保育実践を行う方向性であると同時に、子どもを見る視点にもなっている（無藤，2018b）。一方、2017年に改訂された小学校学習指導要領（文部科学省，2018b）においても10の姿が明記され、小学校教員には、10の姿を踏まえた指導の工夫改善が求められている。

また、幼児期と児童期の子ども達の発達と学びを共通理解するためには、保育者と小学校教員による合同研修の必要性が示されている（鞍馬，2015；吉永，2018）。合同研修においては、子どもを見る共通の視点に踏み込んだ議論の必要性が指摘されている（一前，2016）。今井・後藤（2017）は、10の姿が、子どもを見る共通の視点となり、保育者と小学校教員が互いの教育を理解し合う共通言語となることを示している。また、岸野（2018）は、保育者と小学校教員が、10の

姿を手がかりとして幼児期から児童期へと連続する子どもの発達と学びを捉え直し、幼児期と児童期の教育の内容や指導の仕方の相違点・共通点を理解し合う必要性を指摘している。このように、保育者と小学校教員には、10の姿を手がかりとする合同研修を実施し、幼児期から児童期への子どもの発達と学びの連続性を共通理解することが必要であると考えられる。

しかし、10の姿を手がかりとし、幼児期から児童期への子どもの発達と学びの連続性を共通理解することについては、具体的な取組み内容の提案がなされていない現状がある。一方、岩立（2012）は、保育者と小学校教員が、子どもの発達と学びの連続性を共通理解する話し合いを実証的に検討する必要性を指摘している。そこで、本研究では、保育者と小学校教員に対して、10の姿を手がかりに子どもの発達と学びを共通理解する研修プログラムを実施し、保幼小合同研修会での活用可能性とその効果について実践的に検討することを目的とする。

方法

調査協力者

A 小学校区における小学校（公立）教員16名、B 保育所（公立）保育者6名、C 幼稚園（公立）保育者5名の合計27名。なお、A 小学校区は、2012年度より3校園が連携し、「学びをつなげる」「教員をつなげる」「子どもをつなげる」という3つの柱を中心に保幼小接続の取組みを行っている¹⁾。また、A 小学校区における保幼小接続の取組み状況は、ステップ3（文部科学省，2010）に該当している²⁾。

研修プログラムの内容

本研究における研修プログラムは、A 小学校区における2018年度第2回保幼小合同研修会（Figure 1）として7月27日に実施された³⁾。研修プログラムの内容は、Table 1に示した通りである。また、研修プログラム内容の1つである保育カンファレンスで活用したエピソード事例⁴⁾については、Table 2に示した。



Figure 1 合同研修会の様子

Table 1 研修プログラムの内容

①保育体験	
9:00～11:00	A 小学校の教員とC幼稚園の保育者は、B保育所において補助的役割として保育体験を行った ^{*1} 。保育体験の前には、B保育所の保育目標を確認した。また、保育目標につながる子どもの姿が見られた場面や、保育目標につながる子どもの姿が見られた際の保育者の援助と環境構成を意識しながら保育体験を行った。なお、B保育所の保育者については、通常の業務を行う必要があるため、各自が担当するクラスで保育を行った。
②講義と演習 ^{*2} (保育者と小学校教員が含まれる1グループ5～6人の5グループに分かれて行った。)	
13:00～13:20	保育体験の感想交流 B保育所の保育目標につながる子どもの姿が見られた場面や、その場面における保育者の援助や保育環境について交流し合った。
13:20～13:40	幼児期と児童期の教育の内容等と10の姿について共通理解 ^{*3} 幼児期の教育と小学校教育の内容や指導の方法、評価の相違点や共通点について、また、「高知県保幼小接続期実践プラン」(高知県教育委員会, 2018)の冊子を活用し、10の姿が明確化された理由及び10の姿具体例(文部科学省, 2016)について理解した ^{*4} 。
13:40～15:00	保育カンファレンス B保育所、C幼稚園のエピソード各1事例(Table 2)の映像を視聴後、映像の中の子どもが何を体験しているのか、また、体験したことが10の姿のどの姿につながるのかグループで話し合い、全体で共有した。

*1 筆者は、調査実施時A小学校教員であったため、小学校教員として保育体験に参加した。

*2 午後を実施された講義と演習については、筆者が進行係を担当した。

*3 筆者が講義を行った。

*4 A小学校においては、研修プログラム実施前に、職員研修として10の姿の概要について共通理解する研修がされていた。B保育所とC幼稚園においては、園内外の研修等で10の姿について共通理解し、2018年度より10の姿を考慮した保育実践が行われていた。

Table 2 保育カンファレンスにおけるエピソード事例

エピソード概要	
B 保育所 5歳児男児 6月28日	石鹸削りが上手で、先生に石鹸削りの名人と言われたC男。後から遊びに加わったD男とE子に石鹸削りを教えた。手で一緒に削り器を持ってあげたり、お手本を見せてあげたりと名人として2人に教えるC男。削っている途中で、C男は、2人の肩を持ち、「D男とE子は、おれの仲間」と言った。その後も3人は、石鹸を削ったり、削った石鹸をボールに入れ、泡立てたりしていた。
C 幼稚園 5歳児男児 6月27日	A男は、石鹸で泡立てた水を緑色にしたいと考えた。イチゴの葉をつみ、コップに入れるA男。すりこぎでコップに入れたイチゴの葉をつぶすが、なかなか思うような色にはならない。先生が「使っていた道具が違うのかな」「葉っぱが違うのかな」と言った。隣にいたB子は、「ざらざらのがいいよ」とすり鉢を持ってくる。A男は、すり鉢をもらい、イチゴの葉と水を入れた。

調査データ

調査データは、一連の研修プログラム終了後、調査協力が記述した感想である。また、本研究における研修プログラムは、保幼小それぞれの校内研修及び園内研修として位置づけられ、A小学校区における保幼小合同研修会として実施された。そのため、本研究により得られたデータに関しては、A小学校区における保幼小合同研修会の成果物として共有された。

分析方法

記述された感想は、意味内容が1つのまとまりになっている文・節・句で区分し1項目とした。その結果、全体の文・節・句は、88項目になった。このうち、研修プログラム内容に関するものは、64項目であった。64項目について、佐藤(2008)の質的データ分析法を用いて検討した。

倫理的配慮

筆者による学会、論文発表に関してのデータ活用については、各所属長に口頭で説明し、同意を得た。

結果と考察

本研究では、佐藤(2008)に依拠し、研修プログラム内容に関する64項目それぞれを対象に、「何を語っているのか」を表すコーディングを行った(オープンコーディング)。次に、意味内容が共通もしくは類似するオープンコーディングに着目し分類した結果、9カテゴリーが抽出された。9カテゴリーのうち、【子どもの発達と学びの共通理解】、【保幼小接続への意欲】、【具体的な事例からの学び】、【教育の違いを再認識】の4カテゴリーは、保育者と小学校教員両方の感想から抽出された。【保育者の気づき】、【幼児期の学びを発信】の2カテゴリーは、保育者の感想から抽出された。【幼児理解】、【児童期へつなぐ】、【保育者の専門性からの学び】の3カテゴリーは、小学校教員の感想から抽出された。以下、抽出された各カテゴリーについて説明する。なお、カテゴリー名を【 】、記述された感想を“ ”、また感想“ ”の中の(保)は保育者、(小)は小学校教員の感想であることを示す。カテゴリー名とオープンコーディングは、Table 3に示した通りである。

(1) 保育者と小学校教員両方の感想から抽出したカテゴリー

【子どもの発達と学びの共通理解】 “なんとなく幼児の姿を捉えるのではなく、何を目指して、どんな力をつけたいのか説明してくださった後、話し合いができたので、良かったと思いました(小)”, “この学びが小学校へつながっていくということをお互いに確認

ができたよい研修となりました(保)”等の感想から、保育者と小学校教員は、幼児期から児童期へと連続する【子どもの発達と学びの共通理解】ができたと考えられる。保育者と小学校教員が、円滑な保幼小接続を行う上で必要とすることは、子どもの発達に関して相互に理解を深めること(本山・中山他, 2008; 本山・山田他, 2008)や、また、幼児期から児童期への移行を意識したかわりや、それぞれの発達観、教育観を共有すること(神長, 2011)である。【子どもの発達と学びの共通理解】のカテゴリーが抽出されたことから、本研究における研修プログラムは、保育者と小学校教員が、幼児期から児童期へ子どもの発達と学びの連続性を共通理解する場になったと言える。

【保幼小接続への意欲】“今後も子どもの姿などを共有していきたいです(小)”, “これからもつながりを大切にしていきたいと思います(保)”等の感想から、保育者と小学校教員は、本研究における研修プログラムを通して、【保幼小接続への意欲】を持つことができたと考えられる。保幼小の円滑な接続を行うためには、保育者と小学校教員が、保幼小接続の取組みに関心を持つことが重要である(神長, 2006)。本研究における研修プログラムは、保育者と小学校教員に保幼小接続への関心のみならず、【保幼小接続への意欲】を持たせたと捉えられる。

【具体的な事例からの学び】“保育所、幼稚園での「学び」遊びの中で小学校以降での学びの基礎となるものを学びとっているということがよく分かる事例(小)”, “エピソードを通して実際に子どもたちが経験していくことを探るとともに(保)”等の感想から、【具体的な事例からの学び】が、幼児期の子どもの学びを理解するための契機になったと考えられる。保育者が幼児期の遊びの中の学びを小学校教員に伝える方法の1つは、保育者と小学校教員が具体的な遊び場面を共有した上で、どのような学びがあったのか言語化することである(岸野, 2018)とされている。本研究における研修プログラムを受けた保育者と小学校教員は、幼児期の遊び場面の具体的な事例を通して、幼児期の遊びの中の学びを理解できたと言える。

【教育の違いを再認識】“幼児期の教育と児童期の教育の違いはどこにあるのかということが、今日ことばを目にしてよく分かり(小)”, “保育体験&協議を通し、保幼と小学校の教育原理の違いも改めて感じるとともに(保)”の感想から、保育者と小学校教員は、幼児期と児童期の【教育の違いを再認識】したと言える。保幼小接続期における保育・教育課程については、保育者と小学校教員が、幼児期と児童期それぞれ異なる内容をどちらか一方が他方に合わせるもので

はなく、互いに見通した上で編成、実施する必要がある(文部科学省, 2010)。そのためにも、保育者と小学校教員は、幼児期と児童期それぞれの教育の違いを認識する必要がある。【教育の違いを再認識】のカテゴリーが抽出されたことから、本研究における研修プログラムは、保育者と小学校教員が、それぞれが担う教育の違いを踏まえた上で、幼児期から児童期へ連続性を持った保育・教育課程の編成・実施の見通しを持たせることを可能にすると言える。

(2) 保育者の感想から抽出したカテゴリー

【保育者の気づき】“保幼での取り組みを小学校の先生に知っていただき様々な意見や、別の角度から見た考えを聞くことで、普段自分自身が保育でやっていることを振り返り、気づくこともたくさんありました”, “実際に子ども達の姿を見ていただいて、感想の中で小学校の先生が感じられたことなどを聞かせていただき、毎日一緒にすごしていると気がつかないこともあり、きっかけとなったことはとても良かった”等の感想から、保育者は、本研究における研修プログラムを通して、自身の保育実践への気づきを得たと考えられる。保育者と小学校教員は、保幼小接続の取組みにおいて共に活動することにより、それぞれの苦手な部分や未知の部分助け合う(柴崎, 2011)とされている。このことは、保育者と小学校教員が、互いに新たな視点を得ることができることを示唆するものである。したがって、【保育者の気づき】のカテゴリーが抽出されたことから、本研究における研修プログラムは、保育者に新たな視点の獲得を促したと捉えられる。

【幼児期の学びを発信】“今後も10の姿を意識しながら、それを小学校にわかりやすく伝えていけるようにしていきたいと思います”等の感想から、保育者は、幼児期の子ども達の学びを発信する必要性を認識したと言える。幼児期の教育は、子どもの内面に働きかけ、子ども一人一人の可能性を見出したり、伸ばしたりすることをねらいとしているため、小学校以降の教育と比較して「見えない教育」と言われている(文部科学省, 2005)。そのため、保育者は、幼児期の教育が子どもの発達や学びに果たす意味について積極的な情報発信を図る必要がある(白神・周東・吉澤・角谷, 2017)。保育者が【幼児期の子どもを学ぶを発信】する必要性を認識することは、今後、保育者のみならず、小学校教員による幼児期の子ども理解を促す契機になると考えられる。

(3) 小学校教員の感想から抽出したカテゴリー

【幼児理解】“子どもたちは、幼児期に本当にたくさんの経験をしているんだと思いました”等の感想から、小学校教員は、本研究プログラムを通して幼児期

Table 3 抽出した9カテゴリーの一覧

カテゴリー名	オープンコーディング	記述者 ^{*1}	
保育者と小学校教員から抽出されたカテゴリー1	【子どもの発達と学びの共通理解】 小学校5 保育所4 幼稚園3	なんとなく幼児の姿を捉えるのではなく、何を指して、どんな力をつけたいのか説明しただきした後、話し合いができた	小
		保育体験→合同研修、DVDから「10の姿」を考えるとという流れであったことで、実感を持って連携について考えることができた	小
		自分が持っていなかった視点が与えられる	小
		幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を今回の研修で初めて知る	小
		様々な意見を交流することで得た新たな発見	小
		学び合える場となった	保
		小学校の先生方が考えようとしてくださること	保
		一緒に考えることができてよかった	保
		お互いに確認ができた	保
		小学校の先生が歩み寄ってくれていることへの感謝	幼
		無意識を意識化することの大切さ	幼
		子どもの育ちを共有できる場となった。	幼
		連携をこれからも続けていきたい	小
		子どもの姿などを共有していきたい	小
【保幼小接続への意欲】 小学校2 保育所3	連携を深めていきたい	保	
	連携を続けたい	保	
	つながりを大切にしていきたい	保	
【具体的な事例からの学び】 小学校2 保育所4 幼稚園1	保育カンファレンスは、保幼小双方の先生方にとって、大変有効	小	
	保育所、幼稚園での「学び」（遊びの中で小学校以降での学びの基礎となるものを学びとっている）ということがよく分かる事例	小	
	保幼小で確認し合えた	保	
	子どもの姿を見取る良い機会	保	
	エピソードを通して実際に子どもたちが経験していくことを探る	保	
	小学校へつなげていくための育てたい姿を見取った。	保	
【教育の違いを再認識】 小学校1 幼稚園1	保育場面の中に「10の姿」が全て入っていることが共有できた	幼	
	幼児期の教育を児童期の教育の違いはどこのあるのかということが、今日ことばを目にしてよく分かった	小	
保育者から抽出されたカテゴリー1	【保育者の気づき】 保育所3 幼稚園2	保幼小と小学校の教育原理の違いを実感	幼
		小学校教員からの意見が学びにつながる	保
		毎日一緒にすごしていると気がつかないことへの気づき	保
		ちがった新たな視点で子どもの様子を見てもらい、知る機会になった	保
		自分自身が保育でやっていることを振り返り、気づくことができた	幼
		より就学前にいろいろな活動への意欲や主体性を育み、学びの向かう力を養っていきたい	幼
		子ども達には、いろいろな姿がある	保
		援助が小学校へつながっている	保
		子ども達の経験を見取る小学校の先生達の姿	保
		小学校の先生が、幼児期の子どもの達は何を学んでいるのか知ることができた	保
小学校教員から抽出されたカテゴリー1	【幼児理解】 小学校8	小学校の先生が、子どもと遊びの楽しさを共有する姿への感謝	幼
		小学校にわかりやすく伝えていきたい	幼
		友だちに自分の気持ちを伝えることができていた	小
		それぞれの発達段階の子ども理解	小
		幼児期の終わりまでに育ってほしい姿は、小学校にもつながっていくもの	小
		一つの遊びの中で様々な「・育ってほしい姿」につながっている	小
		幼児期の子どもの達の経験を知った	小
		遊びの中で、いろいろなことを学んでいる幼児たち	小
		児童は、保幼小とのギャップを感じつつ、けなげにがんばってくれている	小
		小学校に入ってから自然なスタートが切れる	小
【児童期へつなぐ】 小学校10	「育ってほしい10の姿」は、全ての活動の中で育てていくもの	小	
	指導者自身が、「育ってほしい10の姿」を意識し、子どもたちを指導していくことの大切さ	小	
	この見取りを、小学校は授業改善に生かす必要がある	小	
	小学校が講義形式でとどまっていたはいけない	小	
	日々の生活や授業の中でめあてに向かってじっくり考える時間を取る必要性	小	
	幼児期に育てたい10の姿が小学校でも続けて伸ばしてあげられるような指導	小	
	小学校でも遊びの中の学びの要素を大切にしないといけない	小	
	入学後の生活を安心安定に満ちたものにするのか継続して考えていく必要性	小	
	保幼小での学びをうまく小学校の学びのつなげ、生かしているのか・これからの課題	小	
	これからも学んでいかなければという思い	小	
【保育者の専門性からの学び】 小学校9	温かい、やわらかい雰囲気、子どもたちには一番大切	小	
	視覚支援もたくさん取り入れていた環境づくり	小	
	保育の先生の大変さもつくづく感じた	小	
	子どもへの声かけ等参考になる	小	
	保育者の援助、また環境などが整っていて	小	
	保育者の先生方のすばらしい姿	小	
	子どもをどんな風に見取ったらいいのか幼稚園や保育者の先生方から学ぶ	小	
	子ども同士の関わりを見守り、それぞれの子どもの思いを受けとり肯定的に声をかける先生の姿	小	
子どもへの言葉かけや見守る姿勢は、今度児童との関わりでの参考になる	小		

*1 「保」は、B保育所の保育者、「幼」は、C幼稚園の保育者、「小」は、A小学校教員である。

の子ども理解を促したと言える。小学校教員は、幼児期から児童期へ見通しを持った子ども理解（柴崎, 2011）を通して、子どもの発達と学びの段差に気づき、柔軟に対応する必要がある（古閑, 2018）。したがって、本研究における研修プログラムが小学校教員の【**幼児理解**】を促したことにより、小学校教員は、保幼小接続における取組みの工夫を可能にすることができると考えられる。

【**児童期へつなぐ**】“この見取りを、小学校は授業改善に生かさねばと思いました”，“幼児期に育てたい10の姿が小学校でも続けて伸ばしてあげられるような指導をしていきたいです”等の感想から、小学校教員は、10の姿を手がかりとして幼児期の子どもの姿を見ることにより、子どもの発達と学びの連続性を理解することができたと考えられる。無藤（2012）は、初めて学校生活を体験する1年生及び低学年に必要な学級経営のポイントとして、第1に、低学年という発達の時期の考慮、第2に、授業と学級という形に馴染んでいくべき子どもの導き方、第3に、保護者との信頼関係を挙げ、特に第1、2のポイントが、入学当初の子どもを授業を中心とする学びへと接続させる支援になることを示している。小学校教員が、幼児期の子どもの発達と学びを【**児童期へつなぐ**】ことは、円滑な保幼小接続のための重要な支援となる。【**児童期へつなぐ**】カテゴリーが抽出されたことにより、本研究における研修プログラムは、小学校教員にとって保幼小接続の重要な取組みになることを示すことができたと言える。

【**保育者の専門性からの学び**】“視覚支援もたくさん取り入れている環境づくりにも勉強させてもらいました”，“午前中の保育体験では、子ども同士の関わりを見守り、それぞれの子どもの思いを受けとり肯定的に声をかける先生の姿が印象的でした”等の感想から、小学校教員は、保育体験を通して、保育者の子どもへのかかわりや環境構成から学びを得たことが示された。人事交流教員として小学校教員から幼稚園教員への異動経験のある廣内（2013）によれば、幼稚園教員としての経験は、小学校入学直後の週案作成及び子どもの思いや意識の流れを重視した授業作りにつながり、また、子どもの発達と学びをつなげるための支援となるとされている。一方、小学校教員全員が人事交流を経験することは、不可能である。しかし、小学校教員が、保育体験や合同研修の場で保育者の専門性から学び、また、学んだことを実践の場で生かすことは可能であると考えられる。したがって、小学校教員が、保幼小合同研修会等を通して保育者の専門性から学ぶことは、幼児期から児童期への子どもの発達や学びを

連続させるための支援の1つになると考えられる。

（4）まとめと今後の課題

本研究の目的は、10の姿を手がかりに子どもの発達と学びを共通理解する研修プログラムを実施し、保幼小合同研修会での活用可能性とその効果を検討することであった。本研究における研修プログラムにより、保育者と小学校教員は、それぞれが担う【**教育の違いを再認識**】すると共に、【**具体的な事例からの学び**】を通して【**子どもの発達と学びの共通理解**】を行い、【**保幼小接続への意欲**】を持つことができたと言える。また、保育者は、自身の保育実践について【**保育者の気づき**】があったり、【**幼児期の学びを発信**】する必要性に気づいたりすることができたと考えられる。一方、小学校教員は、【**幼児理解**】を行い、幼児期における子どもの発達と学びを【**児童期へつなぐ**】必要性に気づくことができ、また、本研究における研修プログラムの1つである保育体験から、【**保育者の専門性からの学び**】を得ることができたと言える。これらのことから、本研究における研修プログラムは、保育者と小学校教員にとって互恵性のある研修であったと考えられよう。

保育者と小学校教員による学級経営観の相違は、小学校入学前後における集団生活の場において子どもに求める行動様式の変容につながる（中川・西山・高橋, 2009）ため、保幼小の円滑な接続を妨げる原因の1つになると考えられる。しかし、保育者と小学校教員が、互いの教育の相違を再認識し、また、子どもの発達と学びを共通理解した上で、互いに学び合うことができる本研究における研修プログラムは、保育者と小学校教員それぞれが持つ子ども観や指導観を捉え直させる機会（石田, 2015）となったと言えよう。

また、調査協力者27名中11名（小学校教員16名中6名、B保育所の保育者6名中2名、C幼稚園の保育者5名中3名）の感想には、10の姿について記述（Table 4）がなされていた。保育者は、小学校教員と共に、幼児期の子どもの姿が10の姿につながることを共通理解できたことについて記述しており、幼児期の子どもの姿を10の姿から見ることにより、小学校教員と共通理解することができたと捉えていると考えられる。一方、小学校教員は、10の姿の視点から、幼児期の子どもの姿を見ることを通して、具体的に子どもの発達と学びの連続性を理解できたことについて記述しており、10の姿を手がかりに幼児期の子どもの発達と学びを理解することができたと見えよう。保育者と小学校教員は、語りに用いる語のイメージ（野口他, 2007）や、学級経営観が異なる（中川・西山・高橋, 2009）ため、子どもを見る視点に相違があると考えられる。しかし、

子どもを見る手がかりを共有することにより、子どもの見方を共通理解することができると言える。保育者と小学校教員は、本研究における研修プログラムにより、10の姿を見る視点と具体的な事例について話合うことを通して、幼児期から児童期へと接続する子どもの発達と学びを共通理解することができたと考えられる。以上のことから、本研究が行った研修プログラムは、保育者と小学校教員が、子どもの発達と学びを共通理解する一助になると言えよう。

Table 4 10の姿についての記述例

記述者	記述例 ^{*1}
保育者 (B 保育所)	短い時間の中で、子どもの姿を深く捉えようと、グループ内でも沢山の意見や気付きが出て、学び合える場となった。10の姿の話し合いの中でも、 <u>子どもの姿が全部の姿に重なっていることを保幼小で確認し合えた</u> ことは、大きな成果につながったのではないかと思う。(略)
保育者 (C 幼稚園)	(略) 保幼での取り組みを小学校の先生に知っていただき様々な意見や、別の角度から見た考えを聞くことで、普段自分自身が保育でやっていることを振り返り、気づくこともたくさんありました。また、「10の姿」を考へるにあたって、 <u>保育場面の中に「10の姿」が全て入っていることが共有できた</u> とともに、無意識を意識化することの大切さを学ぶこともできました。(略)
小学校教員	小学校では、各教科に分かれ学習を進めているものの、 <u>「育ってほしい10の姿」は、何ら変わりなく、また全ての活動の中で育てていくものであると感じました。そのために、指導者自身が、それを意識し、そういう目を持って子どもたちを指導していくことが大切であると感じました。</u>
小学校教員	保育体験→合同研修、 <u>DVDから「10の姿」を考へる</u> という流れであったことで、実感を持って連携について考へることができました。保幼の先生方と交流することで、自分が持っていなかった視点が与えられるので、本当によかったです。(略)

*1 記述例の中の(略)は、筆者が省略した箇所であり、強調、下線は、筆者によるものである。

最後に本研究における限界と、今後の課題を述べる。本研究では、研修プログラム後の感想から、子どもの発達と学びを共通理解する研修プログラムの効果を検討した。今後は、アンケート調査等から、研修プログラムが、保育者や小学校教員の意識及び個々の保育、教育実践にどのような影響を及ぼしたのか検討する必要があると考えられる。また、本研究が行った研修プログラムは、保育体験や幼児期の子どもの姿を事例とする等、幼児期の子どもの発達と学びに重点を置いた内容であった。さらに、本研究における研修プログラム実施時期が7月ということもあり、保育カンファレ

ンスで取り上げたエピソード事例は、5歳児前半の子どもの姿であった。今後は、5歳児後半の子どもの姿を取り上げることにより、幼児期から児童期へ子どもの発達と学びの連続性を共通理解する必要があると言える。

一方、保育者と小学校教員による10の姿に基づく幼児期から児童期へと子どもの発達と学びをつなぐカリキュラムの作成においては、5歳児の事例の多さと比較し、1年生の具体的な姿や学びが提示された事例の少なさが指摘されている(堀越・山田, 2017)。また、小学校教員には、10の姿を見る視点とする幼児期の子どもの発達と学びの連続性を生かした授業を展開する必要性が求められている(松畷, 2018)。これらのことから、今後は、スタートカリキュラムにおける子どもの姿の事例から10の姿を見る視点とする内容を含めた研修プログラムを実施し、検討することも考えられよう。

【注】

- 1) 「学びをつなげる」については、A小学校区の各校園において保幼小接続期カリキュラムを実践している。「教員をつなげる」については、A小学校区保幼小合同研修会を年に2回実施している。「子どもをつなげる」については、子ども同士の交流活動であり、1年生と5年生の児童それぞれが、5歳児と互恵性のある交流活動を行っている。また、子ども同士の交流活動については、互いの教育、保育課程の中に位置付けられており、活動にかかわる保育者と小学校教員が、交流活動前後に協議を行っている。さらに、他の学年及び他の年齢の幼児についても、必要に応じて互恵性のある交流が行われている。これら3つの柱を支える取組みとして、年度当初と年度末等には、次年度入学予定の子ども、及び1, 2年生の子どもの様子について情報交換会等が実施されている。なお、本研究が行った研修プログラムの内容の1つである保育体験については、2012年度以前より、A小学校の教員とC幼稚園の保育者が、夏季休業中の研修の1つとして実施されていた。
- 2) 保幼小接続における取組み状況の目安は、文部科学省(2010)により、下記のように示されている。ステップ0は、連携の予定・計画がまだ無い。ステップ1は、連携・接続に着手したいが、まだ検討中である。ステップ2は、年数回の授業、行事、研究会等の交流があるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない。ステップ3は、授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育課程

の編成・実施が行われている。ステップ4は、接続を見通して編成・実施された教育課程について、実践結果を踏まえ、更によりよいものになるよう検討が行われている。

- 3) 第1回目の保幼小合同研修会は、2018年6月13日に実施された。研修内容は、2017年度保幼小接続に関する取組みの報告及びA小学校区での取組みである「聴く力の向上」に関して、B保育所、C幼稚園の取組み事例を共有することであった。
- 4) エピソード事例は、筆者がB保育所、C幼稚園において、午前中に行われた自由遊び時間の子ども様子をビデオカメラで撮影し、撮影された映像の中から、8分程度の映像をエピソードとして抽出したものである。

【引用文献】

- 廣内厚士 (2013). 人事交流教員から見る保育者の専門性 発達134 (pp40-45) ミネルヴァ書房
- 堀越紀香・山田亜紀子 (2017). 幼小接続期のカリキュラム 全国自治体調査の分析 国立教育政策所 (編) 幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究〈報告書〉(pp.42-51) Retrieved from https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h28a/syocyu-5-1_a.pdf (2017年11月19日)
- 今井康晴・後藤正矢 (2017). 改訂幼稚園教育要領と改訂小学校学習指導要領における幼小接続 東京未来大学研究紀要, 11, 171-179.
- 石田友貴 (2015). 「教師が育つ」連携のあり方について - 保幼小連携校園における教員の子供観・指導観の変容の分析を通して - 東京学芸大学教職大学院年報, 3, 109-118.
- 一前春子 (2016). 保幼小連携研究の動向 - 取り組みの効果と移行期に育つ力の認識 - 共立女子短期大学文科紀要, 59, 15-25.
- 一前春子・秋田喜代美 (2012). 地方自治体の接続期カリキュラムにおける接続期とカリキュラムの比較 国際乳幼児教育研究, 20, 85-95.
- 岩立京子 (2012). 幼保小連携の課題と今後の方向性 保育学研究, 50, 76-84.
- 神長美津子 (2006). 幼小連携を進める視点とは何か - 発達や学びの連続性から考える - 社団法人全国幼児教育研究協会 (編) 学びと発達の連続性 - 幼小接続の課題と展望 - (pp71-79) チャイルド本社
- 神長美津子 (2011). 「小学校との連携」その現状と課題 永井聖二・神長美津子 (編) 幼児教育の世界 - 子ども社会シリーズ2 - (pp71-83) 学文社
- 岸野麻衣 (2018). 小学校への接続 無藤 隆 (編) 10の姿プラス5・実践解説書 - 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)と重要事項(プラス5)を見える化! - (pp102-109) ひかりのくに株式会社
- 高知県教育委員会 (2018). 高知県保幼小接続期実践プラン 高知県教育委員会
- 古閑美保子 (2018). 子どもの姿から考える幼小接続の在り方 佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要, 2, 204-219.
- 厚生労働省 (2008). 保育所保育指針 Retrieved from <http://www.eqg.org/oyanokai/shishinzenbun.pdf> (2019年6月30日)
- 厚生労働省 (2018). 保育所保育指針 平成29年告示 フレーベル館
- 鞍馬裕美 (2015). 保幼小連携推進に関する一考察 - 東京都品川区における連携事例の分析を通じて - 明治学院大学心理学紀要, 25, 21-33.
- 松崎洋子 (2018). 幼児教育の学びを生かしたスタートカリキュラムの実践 千葉大学教育学部研究紀要, 66 (2), 91-98.
- 無藤 隆 (2012). 小学校低学年の教育とは何か - その発達の特徴と指導のポイント - 児童心理 66 (pp1-11) 金子書房
- 無藤 隆 (2018a). 今後の幼児教育とは 無藤 隆 (編) 10の姿プラス5・実践解説書 - 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)と重要事項(プラス5)を見える化! - (pp118-127) ひかりのくに株式会社
- 無藤 隆 (2018b). 3法令の改訂(改定)のポイントとこれからの幼児教育 無藤 隆 (編) 育てたい子どもの姿とこれからの保育 - 平成30年度施行 幼稚園・保育所・認定こども園 新要領・指针对応 - (pp1-6) きょうせい
- 文部科学省 (2005). 子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方 (答申) Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013102.htm (2019年1月27日)
- 文部科学省 (2008a). 幼稚園教育要領 Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/you.pdf (2019年6月30日)
- 文部科学省 (2008b). 小学校学習指導要領 (平成20年3月告示) 東京書籍
- 文部科学省 (2010). 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について (報告) Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi

- /toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/11/22/1298955_1_1.pdf (2019年1月24日)
- 文部科学省 (2016). 幼児教育部会における審議の取りまとめについて〈報告〉 Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/sonota/1377007.htm (2018年1月28日)
- 文部科学省 (2018a). 幼稚園教育要領平成29年告示 フレーベル館
- 文部科学省 (2018b). 小学校学習指導要領 (平成29年告示) 文部科学省
- 文部科学省・厚生労働省 (2009). 保育所や幼稚園等と小学校における連携事例集 Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1258039.htm (2019年2月2日)
- 本山徹哉・中山智哉・小林久美・平山静男・白瀬浩司・長谷川勝久・山田英俊・柳 昌子 (2008). 保育者の年長児に対する現状認識と保・幼・小連携への対応ー質問紙調査の分析を中心にー九州女子大学紀要人文・社会科学編, 45 (1), 35-57.
- 本山徹哉・山田英俊・中山智哉・小林久美・長谷川勝久・白瀬浩司・柳 昌子 (2008). 新入児童の状況と保・幼・小連携の課題ー福岡県行橋市の小学校教員を対象とした質問紙調査の分析を中心にー九州女子大学紀要人文・社会科学編, 44 (3), 31-49.
- 中川智之・西山 修・高橋敏之 (2009). 幼保小の円滑な接続を支援する学級経営観尺度の開発 乳幼児教育学研究, 18, 1-10.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018). 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 平成29年告示 フレーベル館
- 野口隆子・鈴木正敏・門田理世・芦田 宏・秋田喜代美・小田豊 (2007). 教師の語りに用いられる語のイメージに関する研究ー幼稚園・小学校比較による分析ー教育心理学研究, 55, 457-468.
- 酒井 朗 (2011). 保幼小連携の原理的考察 酒井 朗・横井絃子 (著) 保幼小連携の原理と実践ー移行期の子どもへの支援ー (pp63-77) ミネルヴァ書房
- 佐藤郁哉 (2008). 質的データ分析法ー原理・方法・実践ー 新曜社
- 佐々木晃 (2016). 小学校との連携・接続 日本保育学会 (編) 保育学講座5 保育を支えるネットワークー支援と連携ー (pp195-216) 東京大学出版会
- 柴崎正行 (2011). 幼児期から学童期へと学びを連続させていくために 社団法人全国幼児教育研究協会 (編) 学びと発達の連続性ー幼小接続の課題と展望ー (pp56-70) チャイルド本社
- 白神敬介・周東和好・吉澤千夏・角谷詩織 (2017). 幼児期に求められる指導内容についての保育者と小学校教員の考えの相違 上越教育大学研究紀要, 37, 49-55.
- 横井絃子 (2007). 幼小連携における「接続期」の創造と展開 お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 4, 45-52.
- 横井絃子 (2011). 保育所・幼稚園と小学校の違い 酒井 朗・横井絃子 (著) 保幼小連携の原理と実践ー移行期の子どもへの支援ー (pp29-48) ミネルヴァ書房
- 吉永安里 (2018). 小学校への接続 無藤 隆 (編) 育てたい子どもの姿とこれからの保育ー平成30年度施行 幼稚園・保育所・認定こども園 新要領・指針対応ー (pp93-97) ぎょうせい

【付記】

本研究を行うにあたり、ご協力いただきました A 小学校区の子どもたち及び先生方に感謝の意を表します。特に、前 A 小学校校長門田満穂先生、前 B 保育所所長猪野智津先生、C 幼稚園園長横田純美代先生にお礼を申し上げます。本研究は、日本教育心理学会第 61 回総会で発表した内容に、加筆修正を行ったものである。

(主任指導教員 井上 弥)